



の いる 風 景

佐藤 智 さん



【さとう あきら さん】 38歳 北陽

●「千歳神社雅楽会」に所属し笛や舞を担当する

雅楽は、宮廷音楽として継承されてきた日本の伝統音楽。合奏（オーケストラ）で演奏される伝統音楽としては、世界最古と言われている。

佐藤さんは、市内で活動する「千歳神社雅楽会」に所属して、千歳神社秋季例大祭で「笛」を吹いたり「舞」を踊っている。

「今から6年前（平成22年）、雅楽をたしなんでいる知り合いから『週1回練習しているので、良かったら見に来ないか』と誘われたことが雅楽を始めたきっかけ」と話す。当時、雅楽の知識がなく、不安であることを話すと「ギターが演奏できるなら大丈夫」と言われ、笛（龍笛）を担当することになった。

雅楽には、カタカナで書かれたメロディーと笛の指使いを表す記号が記された「カナ譜」と呼ばれる譜面があるが、これまで延々と歌によって伝承されているため、メロディーを覚えな

いと演奏することが出来ない。

佐藤さんが初めて演奏したのは、雅楽の中でも有名な「越殿楽」という曲。「メロディーを覚えて、繰り返し、繰り返し練習した」と振り返る。

平成24年からは「舞」に挑戦している。「蘭陵王」という舞を踊れる方が不在になったため、雅楽会でいろいろと話し合った結果、当時、一番の若年者であった佐藤さんに『やってみないか』と声がかかったのがきっかけと言います。「この舞を習得するため、札幌に住む先生のところから朝早くから夜遅くまで通って猛特訓した」と笑う。

9月に行われた「千歳神社秋季例大祭」では、5枚重ねの衣装をまとい、華麗な装飾が施された面を着けた舞が披露された。「始める前は、少し緊張したが、終わったときは、さすがに良かった」と心境を話す。

「千歳神社雅楽会」は、昭和48年に発足し、現在、中高生の方、サラリーマンの方、自営業の方など、男女合わ

せて14人が在籍しており、活動期には毎週1回、千歳神社の社務所に集まって演奏などの練習を行っている。

現在は、千歳神社秋季例大祭だけで「雅楽」を披露しているが、依頼があれば学校や老人施設などにも出かけ、日本の伝統文化を身近に触れてもらいたいと考えている。

佐藤さんは、雅楽を始めてから「能」などの伝統文化を意識するようになったと言います。勤務先のエルム楽器でワークショップを開催して文化の発信などを行っている。

千歳には雅楽が存在し「雅楽」を身近に触れる機会がある。これは、道内を見ても大変珍しい。

「雅楽」という日本古来の伝統音楽が引き継がれていることを一人でも多くの方に知っていただき、千歳の宝として、この魅力を次の世代につなげていきたい」と熱く語ってくださいました。

日本の伝統音楽「雅楽」を伝えていきたい

